

# 芥川龍之介の求めた「新しい本」

片岡 懋

「それは、或本屋の二階だった。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新しい本を探してゐた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、ショウ、トルストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を読みつづけた。そこに並んでゐるのは本といふよりも寧ろ世紀末それ自身だった。ニイチエ、ヴェルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、……彼は薄暗がりと戦ひながら、彼等の名前を数へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根気も尽き、西洋風の梯子を下りようとした。」

これは芥川龍之介の「或阿呆の一生」(昭2・10「改造」)の最初の一節、「時代」の前半です。この作品は、昭和二年六月二十日の日付のある、久米正雄宛の書簡体の自序が付いており、その中に、「僕はこの原稿の中では少くとも意識的には自己弁護をしなかつたつもり」と書いておりますから、芥川自身のことを書いたものであ

り、「二十歳の彼」というのは二十歳の芥川となりますので、この経験は明治四十四年の或日の黄昏時のこととなります。前年九月第一高等学校の文科に入学した芥川が、「或本屋」——日本橋の丸善の二階で、「新しい本」——新しい思想家の本でも探していたのでしよう。が、「そこに並んでゐるのは本というよりも寧ろ世紀末それ自身だった」と観ずる芥川にとっては、其処に並んでゐる片仮名の名前は、一九世紀末葉という時代の転換期にそれ／＼に自己好みの生き、自己の個性を花開かせ、芸術なり哲学なりの世界にすぐれた成果を残した存在として理解されてはいますが、「熱心に本の背文字を読みつづけ」、「彼等の名前を数へて行」く芥川は、それらの人々の業績を、すぐれた成果として味わい、その考え方なり感じ方なりを現象的に捉え、それらを知識として次々に自己の頭脳の中に収めるだけで終らせ、「新しい本を探して」たのです。次々に目の前に現われて来る外来の思想、文化を、新しい時代の新しい知識として取り込んでゐる人間の相が、其処に示されています。が、新しい思想、文化を示す名前は余りに多いのです。背文字を読みつづ

けるだけで、近代の黄昏はせまって来、新しい思想も萌芽のうちに摘み取られようとしています。「彼は薄暗がりと戦」っています。が、「本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめ」ています。彼はどうしようもなく、「西洋風の梯子を下りようと」します。結局床の上に自らの足で立つことなく、本の背文字を眺める彼は外来の思想、文芸の在り方の根本にまで立ち入って考察し、それを主体化する余裕を有たないままに、それらを単なる知識として吸収するだけで終っていたことが示されています。大正時代の知識人が近代的教養主義者として存在する理由が示されているとも云えます。

こういう人間は芥川だけではありませんでした。野上弥生子は、彼女の幼い男の子二人の成長の過程を書いた「小さい兄弟」(大5・153「読売新聞」に「二人の小さいヴァガボンド」と題し連載、改題は大14・3)に、夫の書棚の中に「トルストイ、ドストエフスキ、ニイチェ、バーナード・ショオ、イブセン、ブランドス——こんな綴の片仮名が沢山見出されました。ストリンドベルクと云う名もその間にあつた一つでありました」と書き、彼女(作品では曾代子)が良人とショオについて話し合っている時、傍らで遊んでいた長男(作品では友一)が、「僕知ってるよ。バーナード・ショオって云ふんでせう?」だって、本棚の御本に書いてあるのよ、片仮名なら僕なんでも読めるんだもの。ねえお母様?」と口を入れて来ますと、

「友さんはそこらの誰か見たいなの。西洋のえらい学者や思想家なら誰でも知ってるんですわ、名前だけはねえ。」

と言ったことが書かれています。「友さんはそこらの誰か見たいな

の」とありますから、西洋のえらい学者や思想家の名前だけは知っているのは良人を指しており、良人に対する笑談として言われているのですが、片仮名の学者、思想家の本を書棚の中に並べているだけの知識人が決して少くはなかったことは暗示されています。

しかし明治期の作家には異なった例を見ることが出来ます。田山花袋は『東京の三十年』(大6・6博文館刊)の一節、「丸善の二階」の中で、

「十九世紀の歐洲大陸の澎湃とした思想は、丸善の二階を透して、この極東の一孤島にも絶えず微かに波打ちつゝあつたのであつた。」

と書き、丸善の二階が西欧の新思想の日本流入の窓口であることを述べ、更に

「それを何ういふ人が買ったか。又それを何ういふ人が読んで何ういふ感じを起したか。読んで了つて何とも思はずに書棚の中に徒らに並べられたか。それとも反古にされて捨てられて了つたか。しかしそのまことの種は——人類の中心にふれた種は、捨てられても捨てられてもつひに捨て了はられて了ふものではなかつた。ゾラのあの強いナチュラリズム、イブセンのあの深い象徴を透して見た人生、ニイチェの強い大きな獅子吼、トルストイの血と肉、『親々と子供』の中にあらはれた *Nihilism*、ハイゼの女性研究、さういふものは、いくら埋めても埋めても埋めきつて了ふことの出来るものではなかつた。極東の一孤島の新しい処女地には、いつ蒔かれるともなくその種は蒔かれて行つた。」

「兎に角、この歐洲大陸の大きな思潮の入って来た形は面白かった。三千年来の島国根性、武士道と儒学、仏教と迷信、義理と人情、屈辱的犠牲と忍耐、妥協と社交との小平和の世界、さういふ中に、ニイチエの獅子吼、イブセンの反抗、トルストイの自我、ゾラの解剖が入って来たさまは偉観であった。勿論、それが最初から正しく入って来たか何うか。何の点まで理解されたか何うか。曲らずに、歪まずに入って来たか何うか。それはわからないが、兎に角、近松と西鶴しかないわが日本文学の中に、烈しく凄しく、颯風か何かのやうに漲って入って来たのは事実であった。若い人達は皆なそれに向って憧憬された。」

と、西欧の作家、思想家がどのように日本の若者たちに迎えられるかを書き、次いで花袋自身が、たま／＼丸善で買った、「安いセリースで、汚い本であったけれども、モウパッサンの十二冊の「短篇集」によって「ガンと棒か何かで頭を撲たれたやうな気がし」、「思想が全く上下を顛倒させられたやうな気」になり、「ドオテエの短篇、コオツベニイの短篇、ツルゲネフの短篇、そんなものからは、もつとぐつと徹底して物が見てある」と思い、「その本を一刻も傍を離さずに、博文館に通ふ途中にも、それをポケットに入れて行った。編輯の余暇にもよめば、車の上でも読み、床の中でも読む」という程の傾倒の結果、「事件を叙したものと心理を描いたものゝ區別、あるところまでしか入って行くことの出来ない作者と出来る作者との區別、ロマンチックな作者とリアリスチックな作者との區別、さういふことがありありと私の頭に映って見え」るようになり、「紅葉、露伴、乃至寒月などの唱道した西鶴とは丸で別な西鶴

の価値が」見えて来たことを書いています。

すべてを並列的に眺めて、それ／＼の思想なり芸術観なりを、次に知識として取り入れ、「西洋風の梯子」の上で下を通る人々を見下している、大正期の知識人とは異って、「丁度さうした一種の転換期に達してゐた」自己の心をもってそれらを受けとめ、主体化することによって自己内面を变革させた、明治期青年の相を示しています。

「『今までは私は天ばかりを見てあこれであつた。地のことを知らなかつた。全く知らなかつた。浅薄なるアイデアリストよ。今よりは己れ、地上の子たらん。獣のごとく地を這ふことを屑ぎよしとせん、徒らに天上の星を望むものたらんよりは——』  
こんなことを私はその時分の感想録に書いた。」

とも花袋は書いています。感傷的に過ぎる書き方ではありませんが、このような生き方の変化が『重右衛門の最後』（明35・5 新声社刊）、『蒲団』（明40・9 「新小説」）、『生』（明41・4〜5 「読売新聞」）、『田舎教師』（明42・10 左久良書房刊）、『トコヨゴヨミ』（大3・3 「早稲田文学」）などの作品を生むことになります。

尤も石川啄木には明日への考察を持たない自然主義者と批判され（『時代閉塞の現状』）、夏目漱石にはすべての問題の解決を時の流れにまかせた「凡庸な自然主義者」（『硝子戸の中』）と嘲笑され、芥川も「妻」や『田舎教師』は退屈な作品であり、「氏の小説を一貫して、月光と性慾とを除いては、何ものも発見する事は出来なかつた。」氏を自然主義の小説家たり、且思想家たる文壇の泰斗と考へる事は今よりも更に出来憎かつた。遠慮のない所を云ふと、自然

主義運動に於ける氏の功績の如きも、『何しろ時代が時代だったからね』などと軽蔑してゐたものである。「あの頃の自分の事」八八・一「中央公論」▽と書いていますが、漱石は彼の処へ問題を持ち込んだ女性に対して、「凡てを癒す『時』の流れに従つて下れと云つています——」私にはそれが実行上に於ける自分を、凡庸な自然主義者として証拠立てたやうに見えてならなかった」と書いてはいますが——し、芥川も

「彼は或郊外の部屋に寝起きしてゐた。それは地盤の緩い為に妙に傾いた二階だった。彼の伯母はこの二階に度たび彼と喧嘩をした。(以下略)

彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合ふものは苦しめ合ふのかを考へたりした。その間も何か気味の悪い二階の傾きを感じながら。「或阿呆の一生・三 家」

「彼は結婚した翌日に『来匆匆無駄費ひをしては困る』と彼の妻に小言を言った。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の『言へ』と云ふ小言だった。」「全右 十五 結婚」

と後には「或阿呆の一生」の中に書いています。「生」なり、『田舎教師』なりに提示されていると同じ家の問題で苦しんでいた芥川であったことは明かでしょう。が、それを問題として作品に提示することは容易に出来なかつた芥川でもありました。しかし「西洋風の梯子を下りようとした」人は、時代の「薄暗がり」と戦う為には、近代的な教養主義だけでは不十分なことを観じていたのです。だから丸善で彼の頭の上の電燈がついた時、「彼は梯子の上に佇んだまま、本の間で動いてゐる店員や客を見下し」ているのです。が、「彼

等は妙に小さく、「如何にも見すばらし」い存在でした。西欧に起つた近代思潮の取り入れ口としての丸善の二階に働いている人々は、其処で働くことよつて、近代日本の新文化の担い手の一人としての誇りを持っていたのでしようが、彼等は必しもそれら新思潮についての知識を身に付けていたわけではないでしょう。それを取り扱う処に生活の資を求めていただけの人が大部分でしょう。書棚の間に動いている客にしても、丸善の雰囲気味わっている人、其処で一冊の本を買うことよつて何となく新時代の知識人の仲間入り果したような気分になつてゐる人が少くはなかつたでしょう。芥川に「妙に小さく」、「見すばらしかつた」とされた所以ですが、当然彼はそうした人々の中に降りて、その一員とならうとはしませんでした。

『人生は一行のポオドレルにも若かない。』

彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。……と「時代」の最後を結んでいます。「世紀末それ自身」として、「もの憂い影の中に沈みはじめた」本の一冊、ポオドレルの一行にも及ばないものと観じた人生を送つてゐると思われような人々の相を暫くの間梯子の上から見渡してゐるのですから。が、彼の頭の上についた「傘のない電燈」の光で再び書棚の方へ眼を向けようとしなかつた芥川は、西欧からの「新しい本を探」そうとするかわりに、日本の過去に眼を向けて行きます。

「彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行つた。雨は可也烈しかった。彼は水沫の満ちた中にゴム引の外套の匂を感じた。

すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を発してゐた。彼は妙に感動した。(中略)彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。

架空線は不相変鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかった。が、この紫色の火花だけは、——凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかった。」

と「或阿呆の一生・八・火花」に書いています。一つの火花は瞬間的なものです。が、雨に濡れた架空線は連続的に鋭い火花を放っています。緊張した生命の烈しく燃焼する瞬間、それを連続的たらしめる人生、その為には逞しい生命力を必要とします。「日光小品」(明44年頃執筆)に工場労働者の逞しい筋肉や勇ましい歌に眼を向け、それらに對比して自分ら知識人の生活をイラショナルなように感じて示していた芥川です。「或阿呆の一生」の「時代」はこのような明治四四年の芥川を踏まえて書かれたものであるのですが、大逆事件が生じ、冬の時代に入った日本の現実では、労働者への注目を卒直に展開することも容易なことではなかった筈ですから、そうした方面で「凄まじい空中の火花」を捉えることは容易には出来なかつたのでしよう。しかも江戸的な情緒を漂わせる東京下町と、其処で江戸時代的な文化の雰囲気の中に生活する自己に、「江戸以来の向う島の桜」に感じられる、「一列の纏縷のやう」な憂鬱さを観じ、野呂松人形の鑑賞に洋服を着て行った芥川であつてみれば、江戸時代の人々にそのような生の規範を求めることも出来ません。

このような芥川が惹かれたのが、『今昔物語』などに現われる、中世の世界に生きる逞しい庶民達であり、都の外に活躍する若者だつたのです。「羅生門」(大4・11「帝国文学」)、「芋粥」(大5・9「新小説」)、「煙草と悪魔」(大5・11「新思潮」)などが書かれた所以です。

「帝国文学」に発表された際の「羅生門」の末尾は、次のようになっています。

「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた。」

『今昔物語』の「羅城門登上层見死人盗人語第十八」では、「摂津の国辺より盜せむが為に京に上」つた男が、羅城門の上層で死人の髪を抜き取つていた老婆をおどして、「死人の者たる衣と姫の著たる衣と抜取てある髪とを奪取て、下走て逃」去つたとありますが、芥川は、京都の町の衰微故に、永年使われていた主人から暇を出された下人が、「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇気が出ずにゐたので「すが、羅生門の楼上の老婆から庶民の女達の凄まじい生き様を見せつけられ、門の下で逡巡していた処から一步を踏み出して、積極的に生きる為の行動に出て、老婆の着物を剥ぎ取つて、「またゝく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた」としています。が、積極的に生きる気になりながら、「今昔物語」の下人とは異つて、老婆の着物しか盗らなかつた下人から、「京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあ」る下人の姿を思い浮べられるかどうか、可成り疑問でしょう。しかし兎に角、積極的に、生きようとして具体的、現実的な行動に出た下人が描かれて

いるのですから、既に出来上っている新しい思想を知識として取り入れるだけの境地から、従来からの道徳に囚われることなく、具体的に行動することによって逞しく生きることの必要さを観じた芥川が、それを作品化したと云うことが出来ます。尤も「羅生門」では実際に強盗を働いている下人の姿は描かれておりません。海老井英次氏は

「『倫盗』の中の『交野の平六』（関山の平六とも）が、下人の△明日▽の姿であり、彼は積極的に生きていくのである。もちろん、この点は単に一人物の継承という形に限定して考察するべきではなく、要は「倫盗」の世界（特に前半）が「羅生門」の「夜の底」から通底している世界であることである。」（『鑑賞日本現代文学11芥川竜之介』（昭56・7角川書店刊）所収の「本文および作品鑑賞、羅生門」）

と書いています。しかし「羅生門」の下人は長年京都の町中で主人に仕え、主人の命令によって行動することに慣れて、自主的に行動することから遠ざかっていたのが、老婆の言葉に触発されて、一度は強盗類似の行為を老婆に対して行い得たに過ぎません。交野乃至は関山出身の、なお野性味を所有していたらうと思われる平六なり、摂津から京都へわざわざ出て来た下人と等しなみに扱えるか、どうか、可成り疑問でしょう。単行本『鼻』（大7・7春陽堂刊）に収めるに際して、「下人の行方は、誰も知らない」と改められています。尤も「倫盗」（大6・4〜7「中央公論」）発表と前後して刊行された『羅生門』（大6・5阿蘭院書房）ではまだ、「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いで来た」となっ

ていますが、京都在住の下級官吏の場合にはそうした積極性を持ち得ないことを、下人よりは上位の存在ではありますが、「芋粥」の赤鼻の五位に示していますし、それ以前にも「鼻」（大5・2「新思潮」）の禪智内供によって、人間の本質的な在り方について考えず、形式的な外型だけに囚われている人の、神経的に動かされ易い惨めさを指摘している芥川は、逞しい生命力と、それに支えられた行動力を持ち得るのは、そうした中間的存在である知識人とは異った階層に属することを示しています。「鼻」の庶民や「芋粥」の藤原利仁がそうですし、「煙草と悪魔」の牛商人がそれです。

藤原利仁は民部卿時長の子ですが、敦賀の人藤原有仁の女婿となり、多くは敦賀に住んでいる。「鷹揚な、武人らしい声」の所有者です。京都在住の公卿の子ですが、長く敦賀に住むことによって公卿的な存在から脱出し、逞しい人間となり得た利仁によって、環境の変化が人間に影響を与えることが示されているとも考えられますから、「羅生門」の下人も京都で盗賊集団の一員となった時には、逞しい人間に変化し得るとも考えられますが、長い間下級の使用人であったことがどのような結果になるかは考えておく必要があります。長い間の生活態度なり、生活習慣なりの容易に破り得ない人間の相を「手巾」（大5・10「中央公論」）や「地獄変」（大7・5「大阪毎日新聞」）などに示すことになった芥川でもありますから。利仁は若く（或は稚く）して敦賀へ行き、地方在住の武人として生長した人でしょう。

利仁は芋粥に「異常な執着を持ってゐる」五位に、芋粥を飽きる程饗応する為に、領地の敦賀まで連れて行きます。「山の芋を中

切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥——芋粥は、当時京都では「無上の佳味として、上は万乗の君の食膳にさへ、上せられた。従って、吾五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない」貫重な食物でしたから、五位は「異常な執着を持って」おり、利仁から行く先を云われないのに、都から連れ出されてもいるのです。領国へ着いた利仁は領民に命じて、一夜の間に、「切口三寸、長さ五尺の山の芋」を思いのままに集め、翌日の朝食には一斗ばかりも入る銀の提幾つかに入れた芋粥を、五位の眼前に並べています。都と地方との食生活や価値の変化に触れると共に、京都を唯一の世界と観じ、地方の物資を都へ入れる方法を考えようともせず、型にはまった生活を送っている人々の窮屈さに触れると共に、受領階級の領国に於ける強大な力にも触れています。

その上目的が敦賀であることを聞かされた五位が、「幾多の山河を隔ててゐる越前の国へ、この通り、僅二人の供人をつれただけで、どうして無事に行かれよう。ましてこの頃は、往來の旅人が、盜賊に殺されたと云ふ噂さへ、諸方にある」と考え、「歎願するやうに、利仁の顔を見」て、「敦賀とは、滅相な」と、「殆どべそを掻かないばかりになって、呟い」ている時に、利仁は、「利仁が一人居るのは、千人ともお思ひなされ。路次の心配は、御無用ぢや」と云い、調度掛に「持たせて来た壺胡籙を背に負ふと、やはり、その手から、黒漆の真弓をうけ取って、それを鞍上に横へながら、先に立って、馬を進め」ていきますし、途中で狐を見付れば、それを捕えて敦賀の自分の館への使いに仕立てています。狐は云われた通りにしています。

「狐さへ頭使用する野育ちの武人」の力と、五位を思うがままに取る扱う機智に、京都に踞踏する公卿の知らない逞しさと、それに根ざした力と智慧の可能性を示した芥川でした。

藤原利仁の力と可能性は「野育ちの武人」のそれであると共に、「この辺の下人、承はれ。殿の御意遊どさるゝには」と家来から云われ、その命令は周囲の人々に即座に実行される、領主のそれでしたが、一庶民の可能性の示されているのは、「煙草と悪魔」の牛商人の場合です。

フランス・ザヴィエルに伴っている伊留満の一人に化けて、日本へやって来た悪魔が栽培している煙草の花が咲いた時、その花の名前を問うた牛商人が、悪魔からその名前は教えられないが三日の間に云い当てたら、畠にあるその植物全部と珍陀の酒をあげようと云われ、対手を悪魔と知らずに、当らなかつたら「何でもあなたの仰有るものを、差上げませう」と約束したことだから、「あたらかなかつたらあなたの体と魂とを、貰ひますよ」と云われます。牛商人は後悔しますが、約束は破れませんので、「三日の間、夜の眼もねずに、悪魔の巧みの裏をかく手だてを考へ」、約束の期限の切れる晩に、自分の牛を煙草畑へ追い込み、暴れさせ、びっくりして窓から顔を出した悪魔が、「この畜生、何だつて、己の煙草畑を荒らすのだ」と怒鳴るのを聞いて、煙草という名を当てて、悪魔の鼻をあかします。

賭に敗ければ自分の魂を悪魔の手に渡さなければならぬといふ、一所懸命の場に追い込まれた人間が、精一杯の努力によってその危険から脱出し得る可能性を所有していることを示したものと云

えます。しかも作者は悪魔の力は切支丹信者にのみ強く作用し、切支丹に改宗したばかりの牛商人が「御主エス・クリストの御名にお誓ひ申しまして」約束したと云ったことからこの厄にあったとしていますし、春の始、たなびいた霞の底から、「眠むさうに、響いて来る」、「のんびりした鐘の音を聞いて、この曖々たる日光に浴してゐると、不思議に、心がゆるんで来る。善をしようと思ふ気にもならないと同時に、悪を行はうと思ふ気にもならずじまふ」悪魔を描いています。悪魔さえものんびりした気にしてしまうような日本で暮している牛商人が、西洋渡来の悪魔と賭をし、ザヴィエルが旅行中で相談することも出来ないで、自分で考えて行動に移して、勝つたのです。「西洋風の梯子を下り」て来た芥川が、素朴で野性的な思考とそれを実行した牛商人の勝利を書くことによって、素朴で野性的な人間に於ける、日本人が本来的に所有していた可能性を指摘していることは明かでしょう。苦悩に満ちた現世で、人間自然の愛情を生きる決心をして、切支丹の教えを棄てたおぎんの眼の奥に、「無邪気な童女の心ばかりではない。『流人となれるえわの子供』、あらゆる人間の心」の閃きを観じた、孫七、おすみの夫婦が共に棄教したことを書いた「おぎん」(大11・9「中央公論」)でも、彼等の棄教に大歡喜を示した悪魔を書いた後に、

「これもさう無性に喜ぶ程、悪魔の成功だったかどうか、作者は甚だ懐疑的である。」

と書くことによって、世の中の苦悩をなめ尽した上で、外来の教えを棄てて、再び素朴な自然の愛情に生きる処に、人間の基本的な生の在り方を見ようとしていた芥川であったことを示しています。

しかし「才能の多少を問はずに友だちを作ることは出来なかった」(「大導寺信輔の半生」)芥川は、おぎんの眼の奥に「無邪気な童女の心」のみならず、「『流人となれるえわの子供』、あらゆる人間の心」を観じさせる、複雑な閃きを与えていますし、藤原利仁にも五位を翻弄し、愉快さを味わおうとする意地悪な一面を持たせています。「煙草と悪魔」でも

「が、自分は、昔からこの伝説に、より深い意味がありはしないかと思つてゐる。何故と云へば、悪魔は、牛商人の肉体と靈魂とを、自分のものにする事は出来なかったが、その代に、煙草は、殆く日本全国に、普及させる事が出来た。して見ると牛商人の救拔が、一面墮落を伴つてゐるやうに、悪魔の失敗も、一面成功を伴つてゐるはしなだらうか。悪魔は、ころんでも、たゞは起きない。誘惑に勝つたと思ふ時にも、人間は存外、負けてゐる事がありはしないだらうか。」

と書き加えないではいられなかったのです。この後に日本全国に煙草が拡がったことを考えて、牛商人が賭に勝つたことによって、煙草拡散の担い手の最初の一人になり、悪魔はその所期の目的を達したと云わずにはいられなかったのです。悪魔の考え方の周到さに思い至つた、自己の解釈を書かずにはいられなかったのです。素朴で自然な、野性的な人間の行動力とその可能性を見るだけでは満足し得なかつた芥川は、周密な計画と人間の自然さとを緬い合せた処に生ずる可能性を考えずにはいられなかったのです。「或日の大石内蔵助」(大6・9「中央公論」)の書かれた所以です。



「亡君の讐を復して」後、細川家に預けられた内蔵助の内面について、

「さうだ。すべては行く処へ行きついた。それも単に、復讐の拳が成就したと云ふばかりではない。すべてが、彼の道徳上の要求と、殆完全に一致するやうな形式で成就した。彼は、事業を完成した満足を味ったばかりでなく、道徳を体現した満足をも、同時に味ふ事が出来たのである。しかも、その満足は、復讐の目的から考へても、手段から考へても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない。彼として、これ以上の満足があり得ようか。」

と作者は書いています。亡君の讐を復したことは、武士の道徳の中心であった忠義を生きたことですし、その目的達成の為に、「赤穂の城を退去して以来、二年に近い月日を」「焦慮と画策との内に、費し」て来たのですが、その画策——「一党の客気を控制して、徐に機を熟するのを待ただけでも、並大抵な骨折りではない。しかも讐家の放った細作は、絶えず彼の身边を窺ってゐる。彼は放埒を装って、これらの細作の眼を欺くと共に、併せて又、その放埒に欺かれた同志の疑惑をも解かなければならなかった」のです。そうした知的な計算を基にした企てと、それを見事に成就した非凡な実行力とによって、その事業を完成した人間として内蔵助は書かれてい

るのですが、更に芥川は、内蔵助の島原や祇園での放埒について、

「それは、彼にとっては、不思議な程色彩の鮮な記憶である。  
(中略) 如何に彼は、この記憶の中に出没するあらゆる放埒の生活を、思ひ切つて受用した事であらう。さうして又、如何に

彼は、その放埒の生活の中に、復讐の拳を全然忘却した駭蕩たる瞬間を、味った事であらう。彼は己を欺いて、この事実を否定するには、余りに正直な人間であった。勿論この事実が不道徳なものだなど云ふ事も、人間性に明な彼にとって、夢想さへ出来ない所である。」

と書いて、人間の愛慾本能の発露とその力の強さとを、人間にとって自然なものと考え、それを嘘偽りなく生きる処に人間の本来的な相があり、それを認める処から道徳を出発させることを考えている内蔵助像を示しています。だからこそ内蔵助をして、「すべてが、彼の道徳上の要求と、殆完全に一致するやうな形式で成就し」「その満足は、復讐の目的から考へても、手段から考へても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない」と思わせているのです。内蔵助の放埒が「忠義を尽す手段」ではなく、彼の内面の嘘偽りのない真実を生きたものであったが故に、讐家の細作のみならず、一味の人人の心を捉えることになったのであり、それだけ自己の真実を素直に生きることの大切なことも指摘されていることとなります。この点は「地獄変」(大7・5「大阪毎日新聞」)にも示されていますが、このように人間の内面の真実を率直に生きることの価値を認める内蔵助は、同藩の武士たちの「変心を遺憾とも不快とも思」いながらも、一面では

「彼等の変心の多くは、自然すぎる程自然であった。もし真率と云ふ語が許されるとすれば、気の毒な位真率であった。」

と考え、従つて「彼等に対しても、終始寛容の態度を改め」ず、「復讐の事の成つた今」は、彼等に与ふ可きものは、唯だ憫笑が残

「つてゐるだけ」とする人間として書かれてもいます。勿論彼は武士ですから、彼が変節した同藩の武士に対する憐憫の情は、彼が「人情の向背も、世故の転変も、つぶさに味って来た」大人であるが故に持ち得たものとされていきますし、彼に復讐という事業をさせることになった、もとの現象の持つ問題点に眼を向けるような人としては書かれていません。が兎に角、人間の感情の自然の発露を尊び、用意周到な緻密な計画を樹て得る人の、それらに基づいて為された事業の達成を描くことによって、一応は知的な才能と実行力を所有した人間の可能性を示したと云えましょう。

しかし芥川はこの作を此処で終らせてはいません。世俗一般が復讐を武士の道徳である忠義を生きたという点で賞称し、「彼の放埒のすべてを、彼の忠義を尽す手段として激賞」するだけであることを知った内蔵助は、「一切の誤解に対する反感と、その誤解を予想しなかつた彼自身の愚に対する反感とが」胸中に拡がるのを感じ、「彼の復讐の挙も、(中略)彼自身も、多分この儘、勝手な賞讃の声と共に、後代まで伝へられる事であらう」と考えて、「情無ささうにため息を」する人間となっています。その後、彼は仲間や細川家の侍のいる部屋を抜け出して、「独り縁側の柱によりかゝつて、寒梅の老木が、古庭の苔と石との間に、的楽たる花をつけたのを眺め」ながら、障子の中で続けられている「面白さうな話声」を「聞いてゐる中に、自らな一味の哀情が、徐に彼をつゝんで来るのを意識し」、「云ひやうのない寂しさ」が、「冴返る心の底へしみ透つて来る」のを感じていると書き加えられてもいます。

「春宮の中からぬけ出したやうな、夕霧や浮橋のなまめかしい姿

と共に」あつた「放埒の生活の中に」、煩わしいことすべてを忘れて、「胎蕩たる瞬間を、味った事」を、男性として当然のことと考へていた内蔵助は、その放埒のすべてを「所謂伴狂苦肉の計」として、周囲から激賞されることなど考へていまいなかつたのでしよう。それだけ彼の計算に狂いが出たわけですから、そうした周囲との齟齬について考えることの出来なかつた自己の智慧の至らなさを味わうと共に、全く人間性を所有しない、道徳の鈍型にはまつたやうな人間として後代にまで伝えられることがやり切れない、と考える人間として内蔵助を描くことによって、人間味豊かな上に、種々な場合を十分に計算して自己の知的営みを完成し得る人物を理想的存在と考へていた芥川であつたことが示されています。が、武士としての一般的な道徳に妥協した時、その一般的な道徳に支配される大多数の人の間にあつては、そうした知的な人間の計算がた易くは完全になり得ないこと、余計者の存在として孤独を味わわなければならぬこと、それ故にそうした世界を生きる人間が寂しさを味わわなければならぬことも一応は考へられているやうです。ですから芥川は、世俗的な常識と妥協することなく、自己の芸術を自分の思いのままに仕上げようとする人間を「地獄変」に描くことになりました。

「地獄変」の主人公、絵師の良秀は「その頃絵筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申された位、高名な絵師」でしたが、「横柄で、高慢で」、「世間の習慣とか慣例とか申すやうなものまで、すべて莫迦に致」す、「誰にでも嫌はれて」いる人間です。始めから世間の習慣、慣例を尊重する、一般の世俗的な人々とは異邦人として孤立する存在として良秀は描かれています。

しかも絵師としての良秀のやり方は、当時の常識を超えたものでした。「さる方の御邸で名高い檜垣の巫女に御霊が憑いて、恐しい御託宣があった時」に、託宣は無視して、「有合せた筆と墨とで、その巫女の物凄顔顔を、丁寧に写して居」ますし、「吉祥天を描く時は、卑しい傀儡の顔を写し」、「不動明王を描く時は、無頼の放免の姿を像」っているのですから。しかし其処には、吉祥天と傀儡、不動明王と放免、それ／＼に類似点を見出し、人間存在の本質の一面を捉えて描く、写実的手法を重んずる良秀だったことが示されています。堀川の「大殿様の御云ひつけで描いた、女房たちの似絵なども、その絵に写されただけの人間は、三年とたたない中に、皆魂の抜けたやうな病気になるって、死んだと」云うことにしても、女房たちが皆、大殿の愛慾の本能などの犠牲になったのでしようが、そうした苦悩に満ちた、暗い生活の中に生きている女房たちの憂鬱と悲しみとが如実に写し取られていたに相違ありません。良秀自らは「醜いものの美しさ」に心惹かれて描くと云っていますが、苦悩の中で一所懸命にそれに抗して生きようとする者に同情すると共に、自己の感覚や工夫に自信を有っていた良秀だったと云うことになります。それ故に上記の諸人物を描いて、迫真の出来映を示し得たのでしよう。

そういう良秀が、堀川の大殿から、地獄変の屏風の作製を命ぜられます。出来上ったものは、「外の絵師のに比べますと、第一図取りから似て居りません。」「屏風の片隅へ、小さく十王を始め眷属たちの姿を描いて、あとは一面に物凄い猛火が剣山刀樹も爛れるかと思ふ程渦を巻いて居り」、その「業火に焼かれて、苦しんで居り

ます罪人も、殆ど一人として通例の地獄絵にあるものは」なく、「上は月郷雲客から下は乞食非人まで、あらゆる身分の人間を写して」おります。「東帯のいかめしい殿上人、五つ衣のなまめかしい青女房、珠数をかけた念仏僧、高足駄を穿いた侍学生、細長を着た女の童、幣をかざした陰陽師」、神巫の類、生受領など、いずれも都の日常生活の中で眼に入る人物ばかりです。そのような人々が、「或は鉄の笞に打たれ」、「或は千曳の盤石に押され」、「或は怪鳥の嘴にかけられ」、「或は又毒竜の顎に噛まれ」ているのです。物凄い猛火も、先年の大火事で眼の当りに見た、「炎熱地獄の猛火にもまがふ火の手」によつています。現実に生きている人々の苦悩の種々相を火事を背景として描くかわりに、地獄の呵責を借りて描いたものであることは明かでしょう。

そうした絵の中で殊に目立って凄まじく見えるのは、「まるで獣の牙のやうな刀樹の頂きを半ばかすめて中空から落ちて来る一輛の牛車で」す。「その車の簾の中には（中略）綺羅びやかに装った女房が、丈の黒髪を炎の中になびかせて、白い頸を反らせながら、悶え苦しんで居りますが」、「これを見るものの耳の底には、自然と物凄叫喚の聲が伝はつて来るかと疑ふ程、入神の出来映え」となっています。この車中の女房は良秀の一人娘でした。

彼女は十五歳、小女房として堀川の大殿様の邸に上つていたのですが、良秀はこの娘を「まるで氣違ひのやうに可愛がって」おり、娘の着る物や髪飾りは金銭を惜しまずに整えてやっていました。その可愛がりようは、「唯可愛がるだけで、やがてよい聲をとらうなどと申す事は、夢にも考へて居りません。それ所か、あの娘へ悪

く云ひ寄るものでもございましたら、反って辻冠者らばでも駆り集めて、暗打位は喰はせ兼ねない」程でしたので、機会ある毎に大殿に娘を親許へ返して呉れるように云っていたのです。が、大殿は娘に執心しておりましたので、どうしても返して呉れなかったのです。やがて大殿は娘を手籠にしようとして撲付けられます。その後良秀から、檳榔毛の車の中で「一人のあでやかな上臈が、猛火の中に黒髪を乱しながら、悶え苦しんでゐる」処がどうしても描けないから檳榔毛の車を燃し、「さうしてもし出来るならば……」と云われて、それを承知した大殿によって行われたのが、車と共に良秀の娘を焼くことだったのです。父と主人との間に板挟みになった娘が、主人の要求を拒んだことが原因となつて、良秀の非道さを懲らそうとする主人の手によって殺されたことは明かでしょう。主人の権力と我執が一人の娘の生を不当に梗塞しています。これも亦、現実に生きる、支配される人間の苦悩と悲哀の一つでしょう。それを地獄の苛責の一つに加えた良秀でした。が、この結果は、地獄変の屏風を工夫して、其処に現実に生きる人間の罪惡なり、苦悩なり、悲哀なりを反映させようとした企ての悲劇に終つたことを示すと共に、娘が殺されることまでは考えなかつた良秀の計算の破綻も描かれています。

同時にこのことは、現実の諸問題を従来からある形式の中に盛り込んで表現しようとする、芸術の手法の破綻をも示しています。新しい酒は新しい皮袋に入れなければならぬことを、芥川自身ははっきりと認識したことを示していると云えましょう。が、その為には良秀にどのような努力をさせたらばよいのか、まだはつきりと把

み切れなかつた芥川でもあつたのです。だから、娘の焼き殺される処を見た良秀が、始めはその顔に彼の「心に交々往来する恐れと悲しみと驚き」とを表わしていましたが、ついで「さながら恍惚とした法悦の輝きを、皺だらけな満面に浮べ」、更に「夢に見る獅子王の怒りに似た怪しげな厳さ」が与えられ、「頭の上に、円光の如く懸つてゐる、不可思議な威厳」が加えられ、良秀を嫌う人の眼にも、「開眼の仏」のように映じたとき書き添えることによつて、娘の恐怖と苦悶と悲しみを自己のそれと重ね合せることによつて主体化すると共に、大殿の我執とそれ故の苦悩と併せて自己の我執とそれ故の苦しみに気付き、娘を苦しめる主人と親の存在さえも理解し得た良秀であることを暗示し、そうした良秀の描いた地獄変の屏風であつたからこそ、それまでは徹底的に彼を憎んでいた横川の僧都さえも感動させることが出来たと書くことによつて、芸術を芸術たらしめる芸術性について書くことまではしても、良秀をして新しい芸術の在り方を模索させることが出来ないままに、夏目漱石の「ころ」(大3・4〜8「朝日新聞」)に倣つて、旧い手法の終焉に良秀を殉死させてしまつたのです。「偷盜」に於いて淫乱とそれを破綻なく生きようとして小手先の細工を弄した沙金を殺した芥川は、良秀をも殺すことで、非人間的な知的工夫の行き詰りを、はっきりと示したことになります。

しかし良秀やその娘に地獄の責苦に等しい苦痛を味わせた、具体的、現実的な問題——支配者や親の我執なり、権力なり、そうしたことに無批判に権力者の力なり道徳なりを讚美する人々の存在な

りに切り込む良秀の努力と、それによって開拓されるであろう新しい手法を提示することの出来なかつた芥川は、なおしばらく、旧い現象に新しい解釈を加えることによって、問題の提示とその打開について考えて行きます。

女性であることがわからないままに、少年として長崎の「えげれしや」、「さんた・るちや」に養育されていた「ろおれんぞ」が、年頃になって、隣りの傘張りの娘と通じて娘を身籠らせたとして、言い開きも聴かれずに、「さんた・るちや」から追われ、乞食の境遇に身を墮しながら信仰を失わず、火災に際して火中に取り残された、その娘の子を救った時に女性であることがわかつたという「奉教人の死」(大7・9「三田文学」)で、誤解に基づく既成の認識の容易に打破し得ず、それが個人の上に重く伸掛かることと併せて、「しめおん」という「いるまん」の愛慾の本能と我執のどす黒さを示し、そうした人の世で尊ぶべきものは、「何ものにも換へ難い、刹那の感動に極る」として、雨に濡れた架空線の発する紫色の火花を、「命と取り換へてもつかまへた」という気持ちに通じる結論を書いています。又「枯野抄」(大7・10「新小説」)では、芭蕉の門人達が師の死によって、「久しく芭蕉の人格的圧力の桎梏に、空しく屈してゐた彼の自由な精神が、その本来の力を以て、漸く手足を伸ばさうとする、解放の喜び」を感じていることを、芭蕉の辞世の句、「旅に病むで夢は枯野をかけめぐる」の解釈から導き出しています。「枯野抄」は漱石の死に際して感じた、芥川自身の解放感を重ね合せたものと云われていますが、当時の芥川はそれを芭蕉とその弟子に置き換えなければ書けなかつたのでしょう。芥川自身の

こととしてはつきりと書かれるのは、「或阿呆の一生」に於いてです。

「枯野抄」に於いて世間から偉大な存在として尊崇される人間が、一面では他を圧迫する存在となることを示すと共に、一応は個人の自由な精神から発する解放の喜びを書いた芥川は、その喜びが師芭蕉の死を喜ぶエゴイズムと表裏をなしているものであることを指摘し、自我確立を希求する知識人の欲求の非人間性を示していますが、「奉教人の死」で、自己を天主の子にふさわしい存在たらしめようとした「ろおれんぞ」が、自己を犠牲にした死によって世間の誤解から解放されたことを書き、エゴイズムのない愛の心が、個人を梗塞するもの的一端を打ち崩すことを示し、更に「きりしとほる上人伝」(大8・3、5「新小説」)に於いて、「身の丈は三丈あまり」、「鹿熊なんどのたぐひをとりひしぐは、指の先の一ひねり」ですむ程の力を持っている山男「れぶろぼす」は、性得のやさしさから諸人の難儀に力を貸していましたが、「今天が下に並びない大剛の者を尋ね出して、その身内に仕へよう」と決心し、山里を出て、世俗の大名を志し、「あんちおきや」の帝に仕え、戦争で功名手柄を立てたり、人間の世俗的な欲望や愛慾の本能を利用しようとする悪魔の手下になったりしている間は、穏かな調和的な世界から離れていましたが、世俗的な野心を去って、再び謙遜な心に帰り、諸人の難儀を救けようと志した時には、「世界の苦しみを身に荷うた『えす・きりしと』を負」う存在となることを書いて、素朴に、自己の自然を生きて、自己犠牲の境地を生き抜くことによって、世俗的な欲求を捨て得た時に、調和的な境地が開かれることを示していま

しかしその一方で、堀川の大殿、良秀、「しめおん」によって、男の愛慾の本能が女性を梗塞することを示した芥川は更に、「疑惑」(大8・7「中央公論」)で、肉体的に欠陥があることで妻を憎んでいた男が、明治二十四年の濃尾大地震で崩れた家に腰を打たれて苦しんでいる妻の頭を瓦で殴打して殺したことを書いて、男の愛慾の本能が女性の上に重く伸掛っていることを示していますし、「開化の良人」(大8・2「中外」)では、新時代の女権論者である女性やその友人の女性が、解放された自由のしるしとして、本能の赴くままに奔放に生きている筈の生を、単に愛慾の本能を享樂的に、縦に生きているに過ぎないと観じる男を書いて、彼女達を批判させるだけで、封建時代的な儒教道徳から解放された、新しい道義樹立への胎動としての「墮落論」(坂口安吾、昭21・4「新潮」)を展開させることはなし得ませんでした。その為に「或日の大石内蔵助」に一応は認めていた、人間の自然さの発露の一つである、愛慾の本能の発動は否定的にのみ考えられてしまっています。

処で、具体的、現実的な問題を、地獄変ならぬ新時代の絵画に、よりリアルに描くことの出来なかつた良秀を書いた芥川は、「路上」(大8・6〜8「大阪毎日新聞」)で、「女主人公と云ふのは、いろいろ数奇な運命に弄ばれた結果」、「最後にどこかの癡狂院で、絶命する事になる」という、「新しい『女の一生』を書く心算」で癡狂院まで出掛けて行き、其処に収容されている患者の諸相を観察し、病歴などについて医師の説明を聞く、栗原初子という若い女性

を登場させています。が、彼女は創作に取りかかることなく、作品は終わっています。尤も芥川は、女に惚れられるまでは種々工夫をするのですが、女が惚れると彼女が嫉妬するかどうかを知る為の細工をし、嫌になれば、「僕が是非とも国へ帰らなければならぬやうな理由を書いた」手紙を自ら書き、自分宛に投函し、「それから女と泣き別れの愁歎場がよろしくあって」、「汽車の窓で手巾を振ると云ふのが大詰」となる筋書を考える男を書いて、例によって小細工を弄する男を登場させます。こうして男に捨てられた女が狂気になることを暗示しようとしたとも考えられますし、「疑惑」の主人公は妻殺しが気になって気がおかしくなるのですから、一応狂気の原因に触れています。従って、癡狂院で一生を終る女の狂気の原因について、全く考えていなかった作者ではなかつたのですが、「路上」では書かれないうままに終つて了い、初子は「秋」(大9・4「中央公論」)に、「在学中、既に三百何枚かの自叙伝体小説を書き上げたなどと」噂された女子大卒業生の信子として登場します。しかし芥川はこの作でも信子を作家としては書いておりません。

「秋」の信子は、在学中は周囲から、作家になるものと思われ、やはり作家志望の従兄の俊吉と結婚するものと考えられていたが、父のない家庭の複雑な事情もあり、妹が俊吉を愛していることを知ったこともあったのですが、卒業すると直ぐ、高商出で大阪の商事会社に勤務する青年と結婚して了います。その後一度は創作の筆を執りますが、「思ひの外ペンが進ま」ず、夫も喜ばないということ、やめています。その間、夫の不機嫌を彼の愛慾の本能を充たすことで压えた彼女は、やがて「夜毎に長火鉢を隔てて、瑣末な

家庭の経済の話に時間を殺す」ようになります。夫はそのような妻の変化を喜んでいますが、「信子は時々夫の顔色を窺って見」ています。一方俊吉は大学卒業後、同人雑誌を始め、小説を発表しますが、信子には、その小説には、「軽快な皮肉の後に、何か今までの従兄にはない、寂しさうな捨鉢の調子が潜んでゐるやうに思はれ」ます。

「信子はそれ以来夫に対して、一層優しく振舞ふやうになった。夫は夜寒の長火鉢の向うに、何時も晴れ晴れと微笑してゐる彼女の顔を見出した。その顔は以前より若々しく、化粧をしてゐるのが常であつた。」

と書いた芥川は、俊吉に対して優越感を抱いた信子に俊吉と結婚した妹の新居を訪れさせ、妹も女中もない家で彼と「俊吉の小説だの、共通の知人の噂だの、東京と大阪の比較だの」を話題とした話をさせていますが、その間に沈黙が来ると「待つとは云へない程、かすかに何かを待つ心もち」にさせ、なお内心に俊吉に対して微妙な感情を懐いている信子であることも示しています。しかし「俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破」り、「平然と巻煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を装ってゐる気色も見」せず、その夜寝る前に彼女を庭に誘つた時にも、「怯づ怯づと彼のゐる方へ歩み寄つた」信子に、空を見ながら、「十三夜かな」と呟き、鶏小屋の前では「殆ど独り言かと思ふやうに、『寝てゐる。』と彼女に囁」くだけの俊吉を書いた芥川は、翌朝彼に「好いかい。待ってゐるんだぞ。午頃までにやきつと帰って来るから」と云わせて外出させています。その後妹と話をしている信子は、「心は沈んで、

「何時も好い加減な返事ばかりしてゐ」るのですが、やがて妹が前日の信子の行動を気にしていることを示しますと、俊吉の帰って来るのを待つことなく、妹の処を辞去させてしまします。

自分の心に起る自然の恋愛感情を圧えて大阪の本社員と結婚した信子は、家庭の都合と妹の希望の前に、自己の願望を圧えた自己犠牲の道を選んだと云えますので、一応は個人の自我を抑える家の存在という問題に触れていますが、更に自然の愛慾の本能に左右される行為を否定的に考え、それを超えるものとして、兄弟の愛情の強さを、既に「偷盗」に書いていた芥川は。此処でも妹の感情を大切に考えると共に、仲間達の思惑や夫と俊吉の感情を手玉にとり、愛慾の心をも思うやうに駆使して勝利の快感を味わおうとして工夫する信子を描いて、「路上」の女の感情を手玉にとる男の在り方を、女性の側から描こうとしたと考えることも出来るような書き方をしています。が、信子の真情を察しながら、かつて恋し合いながら、それ／＼に思わぬ結婚をした男女が語り合いながら、上野の山内を肩を並べて歩き、賑かな通りへ出て袂を分つた姿を十三夜の月影に照らさせた、樋口一葉の「十三夜」を思わせる、「十三夜かな」という言葉を口にし、鶏小屋の前では「寝てゐる」と彼女に囁く俊吉に対して、「玉子を人に取られた鶏が」と考えずにはいられない信子を書いて、更に翌日、待っているやうにという俊吉の言葉を無視して、妹の処から車で出た信子が途中で帰って来る従兄の姿に気付きながら、車の幌を上げることもしせず、「肩から洩れようと」する呼び掛けの語をも発せず、空しくすれ違つてしまつた後に、

「『秋』」

信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感しながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。」

と書くことによつて、他人の鼻を明かそうとする知的な工夫は、結局は小手先芸でしかなく、その真情を生き得ない人は身にしみる寂しさを感しなければならぬことを書いて終らせています。

「或阿呆の一生」に、当時の気持を回想して、

「人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつた。が、ヴォルテエルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

彼はこの人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歓びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまっ直ぐに太陽へ登つて行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光りに焼かれた為にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……（十九 人工の翼）

と書いています。信子の妹に対する愛情を、「当世流行のトルストイズム」に敬意を表する信子故のものとした芥川は、「トルストイズムなどには一向敬意を表さ」ず、「始終フランス仕込みの皮肉や警句ばかり並べてゐた」俊吉も車で帰る信子と途下で出逢いながら、それに気付かぬ存在であり、結局信子に肩透かしを喰わされていることを書き、自己の真実を卒直に生きるかわりに、知的な工夫や皮肉や警句に喜びを見出す。享樂的な生き方に生きる寂しさを観じているのですが、自己の在るがままの相を卒直に生きることも、そうした生を生きるべく努力する人間を現代を舞台とする作品に描

き得ないまま、再び過去の世界に眼を向け、「素戔嗚尊」（大9・3）  
く6「大阪毎日新聞」）を書きます。

「素戔嗚尊」は、後に五月二十七日発表の分から後を独立させ、加筆補正の上、「老いたる素戔嗚尊」（大12・5『春服』八春陽堂▽刊）としていきますので、現在全集に見られる「素戔嗚尊」は五月二六日発表の部分までで、高志の大蛇が出て来る処までです。高天原国の青年素戔嗚は、体力でも、腕の力でも、運動能力でも、抜群の力を所有していました。矢は誰よりも遠くへ飛ばし、誰一人飛び越したことのない川巾の広い処を飛び越し、「高天原第一の強力と云はれた手力雄命でさへ、たやすくは出来ようとは思はれな」い大岩を持ち上げます。しかし思兼尊の姪を恋しながら、それを自分で彼女に告げ得ないで、他人に依頼したことから間違いが起き、彼と対立する多数の若者と争つて敗れ、高天原国を追放されます。その後一年程を大気都姫の洞窟で暮し、愛慾の本能に目覚め、それを駆使することを知つた素戔嗚は、更に七年の放浪生活を経て、出雲の簸川の岸边で高志の大蛇に犠として捧げられた櫛名田姫と出逢います。大蛇を退治して、櫛名田姫を妻とした素戔嗚は、彼女の父足名椎が治めていた部落の長となり、足名椎が建ててくれた八咫殿で妻との静かな生活を送り、子供も生まれます。その間一方では何人かの妻を娶り、多くの子の父となります。子供達は成人すると、彼の命ずるままに兵士を卒いて、国々の部落を従えます。その後櫛名田姫に死別した素戔嗚は、彼女との間に生れた八島士奴美に世を譲り、娘の須世理姫と二人で根堅洲国に住み、母の美を受けた彼女に自己の



雄雄しさを与えるべく教育していますが、彼の前に現われた葦原醜男の若さに敗れ、須勢理姫も彼に奪われて了います。

強大な体力なり、腕力なりを所有している一人の男が、愛慾の本能も人間の自然さの一つであることを知り、それを正当に生きることを肯定するに至って、明るい調和的な境地に到達したことを書いて、自己の自然さを卒直に生き、更にそれを磨くことによつて得られる可能性を示した作品と云えます。自然さのみを問題にした時、老年の訪れと共にその力は衰え、若さの前に敗北していますが、葦原醜男を若い時の素戔嗚に匹敵する存在とし、素戔嗚の力と櫛名田姫の美とを兼ね具えるに至つた須勢理姫の配偶者とするることによつて、自然の強大な力と美がどのように止揚され、展開されるものであるかをも示しています。

「素戔嗚尊」に自己の自然を生きる人間の可能性を書いた芥川は、「一塊の土」(大13・1「新潮」)にも自己の目的の実現を目指して、脇目も振らずに生きる一人の女性を描いています。夫に死別したお民は、姑お住の婿とりの話には耳も傾けないで、一人息子廣次の手に、「此処の家の田地は二つにならずに、そっくり」渡そうと願つて、「男手も借りずに、芋を植ゑたり麦を刈ったり、以前よりも仕事に精を出してゐます。」「のみならず夏には牝牛を飼ひ、雨の日でも草刈りに出かけたりし」ています。お住はそういうお民の為に、家の中の仕事は出来るだけ自分の手で片付け、お民の帰つて来る迄に風呂や食事の準備をしています。一年後には小作に出してある桑畑を返して貰い、自分で桑を作り、養蚕を片手間にしよう

で、お住は頑強に反対し、再び婿を入れる話を持ち出します。するとお民は、「おばあさん、お前さん隠居でもしたくなつたんぢやあるまえね?」「お前さん廣のお父さんの死んだ時に、自分でも云つたことを忘れやしまえね?此処の家の田地を二つにしちや、御先祖様にもすまなえつて」と、却つて姑をやりこめ、家を外にせつせと野良仕事に励んでいます。

我が子への愛情を軸に、子の為に少しでも多くの財産をこしらえようと考え、その目的実現の為に一所懸命働く女の相が描かれています。彼女は嫁の身を叱咤し、「お前さん働くのが厭になつたら、死ぬより外はなえよ」と皮肉つてもいます。自分の樹てた目的は決して間違つていないと考え、その実現の為に脇目も振らずに働いている、自信に満ちた女の強さが示されています。

しかし作者は、そういうお氏の働きぶりを一人の庶民の逞しさとして肯定するかわりに、「お民は不毛の山国からこの界限へ移住して来た所謂『渡りもの』の娘だった」為に、土地財産への執着が異常に強く、少しでもそれをふやそうとする「稼ぎ病」にかかつており、それが容易なことでは満足しなかつたことに、原因を求めていきますし、村に流行していたチブスで死んだ人の葬式の穴掘り役に出て、お民も腸チブスに罹り、八日目に死んで了つたことを書いて、彼女の一生を不調和に終らせています。

子の為という場合も、他の為に働いていることになりませんが、それでもこれは自分で定めた目模だつたわけですが、此処では芥川は親子の愛情を考えることなく、姑と嫁の我執の葛藤に左右されると共に、遺伝的な力に動かされている人間を想定し、人間を支配する

無気味な力の一つとして遺伝を考え、それが夫の死後、夫の家をも支配しようとしていることを示そうともしていますが、兎に角、唯財産をふやすことを考えて、遮二無二働く人間は、自己の認識を越えたものに、その日常を左右されている、非自主的な存在と考へ、どうしても肯定する気持にはなれなかったのでしょう。「素戔嗚尊」のように現実とは無関係な題材の時には、自己の自然を鍛錬し、成長させて、逞しく生きる人間を一応は肯定的に描き得た芥川も、現実的、具体的な世界に生きる人に対しては、自己の人生を知的な計算に基づいて構築し、或は皮肉や反語をもって対処することを要求する人だったことが示されています。芥川の自伝物と云われている「保吉もの」の中にも、それは指摘出来ます。

「保吉の手帳から」(大12・5「改造」中の「わん」にはつきりと示されています。これは芥川が海軍機関学校の英語教師をしていた時に出会ったことが基になっているのでしょう。「保吉は薄汚いレストランの二階に脂臭い焼パンを齧ってゐた」時に、「わんと云へ」という言葉に振り向きますと、同校の主計官である若い海軍士官が、窓の下にいる十二、三の乞食に向つて、ネーブル・オレンジの一切を示しながら、「わんと云へ。わんと云へばこれをやるぞ」と云っています。窓の下では、「子供の乞食が頸を少し反らせた儘、目を輝かせてゐます。それを見た保吉は、それ迄に「時時乞食と云ふものにロマンティックな興味」は感じて、「隣憫とか同情とかは一度も感じたことはな」く、「もし感じた」と云ふものがあれば、莫迦か謙つきかだとも信じてゐた」のですが、この時には「ちよいといぢらしい心もち」になっています。しかし芥川はその

「いぢらしい心」にこだわろうとはしていません。

「但しこの『ちよいと』と云ふのは懸け値のないちよいとである。保吉はいぢらしいと思ふよりも、寧ろさう云ふ乞食の姿にレムブランド風の効果を愛してゐた。」

と書き加えることによって、少年乞食に対する憐憫の情を更に展開させたり、主計官の心に存する人間無視の傾向を問題として取り上げるかわりに、かつて見た絵画などから得た印象に重ね合わせる事によつて現実を情趣的に捉えようとすると共にその教養を誇示しようとする芥川であることを示して了っています。

「三十歳の彼はいつの間にか或空き地を愛してゐた。そこには唯苔の生えた上に煉瓦や瓦の欠片などが幾つも散らかつてゐるだけだった。が、それは彼の目にはセザンヌの風景画と変りはなかつた。」

と「或阿呆の一生・三十四色彩」の中にも書いています。「セザンヌの風景画」と重ね合わせる事によつて、その空き地の「色彩」を捉えてはいるのですが、眼の前にある荒廃した現実の意味するものについて考えようとはしておりません。尤も「庭」(大11・6「中央公論」)では、ある宿の本陣に当る、中村という旧家の庭が、庭に無関心な俳人や福沢論吉流の実利主義者などの手にかかつて荒廃し、最後に鉄道と停車場の建設によつて全く破壊されたことを書いて、観念的な文人、近代的な功利主義と文明とが荒廃と関わりを持つことを指摘していますし、

「日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしなかつた。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよつて行つた。それから

『宗教』と云ふ札を掲げた書棚の前に足を休め、緑いろの表紙をした一冊の本へ目を通した。この本は目次の第何章かに『恐しい四つの敵、——疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望』と云ふ言葉を並べてゐた。僕はかう云ふ言葉を見るが早いか、一層反抗的精神の起るのを感じた。それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。」

と「歯車・三夜」(昭2・10「文芸春秋」)に書いて、自己の自由な感性や理智の発動を尊ぶ気持を所有していることを示してはいますが、右の「歯車」の文章に続けて、

「が、伝統的精神もやはり近代的精神のやうにやはり僕を不幸にするのは愈僕にはたまらなかつた。」

と書いて、日本の現実が、折角個性に目覚め、積極的に生きようとしても、人間それぞれの個性を尊重することを知らず、封建時代的道德と功利主義とを結合させたエゴイズムが横行し、個人の権利よりも義務を強調する現実であるが故に、容易にその個性を生きることが出来ず、却つてそのような人を神経的に動かされ易い存在として了うものであり、伝統的精神も個を抑圧し、それを否定的に取り扱うことを要求するものである為に、現実の社会の何処にも安住の場所を見出すことが出来ず、しかもそうした現実をどうしようもないものと観ずるが故に、近代的精神もそれに目覚めた人間を不幸にするものとし、依然として「西洋風の梯子」の途中に立ち留つて、教養として身につけた思想や美意識を駆使して、現実を見渡している外なかつたのです。「ソムブラント風の効果」や「セザンヌの風景画」が持ち出された所以です。

そういう芥川ですから、「わん」の主計官に対しても、彼に壺井栄が「あばらやの星」(昭22・3「銀河」)でワンと云うのは犬であるとはつきり指摘し、喰べたい菓子を眼の前に置かれて、ワンと云えと云われてもワンと云わなかつた、乞食の子を褒めて、彼等を養おうとする醬油工場勤務の「年とつたおじさん」を書いて、乞食の子供達を大団様に扱う大人達を敵しく批判したのと同様なことは書けません。

そんな批判は分り切つた当り前のことと云いそうな芥川ではありませんが、「侏儒の言葉」(昭2・9「文芸春秋」)の中の「小児」で、

「軍人は小児に近いものである。英雄らしい身振を喜んだり、所謂光栄を好んだりするのは今更此処に云ふ必要はない。機械的訓練を貴んだり、動物的勇気を重んじたりするのも、小学校にのみ見得る現象である。殺戮を何とも思はぬなどは一層小児と選ぶところはない。殊に小児と似てゐるのは喇叭や軍歌に鼓舞されれば、何の為に戦ふかも問はず、欣然と敵に当ることである。

この故に軍人の誇りとするものは必ず小児の玩具に似てゐる。緋緘の鎧や鍬形の兜は成人の趣味になつた者ではない。勲章も——わたしには実際不思議である。なぜ軍人は酒にも酔はずに、勲章を下げて歩かれるのであらう？」

と書いています。小児を完成した一人の人間と見ない芥川は、軍人を、小児と同様に、大人になり切れない、感覚的に動かされ易い、知的でない、一種の奇型的存在と考えています。こういう芥川は、十二、三の乞食を人間並に扱わずにからかっている主計官を、非人

間的な考え方の所有者として、正面切つて批判する気にはならなかったのでしょうか。「わん」の中で、俸給を貰いに行った保吉を待たせて、容易に渡さない主計官に対して、「主計官。わんと云ひませうか？え、主計官」と保吉に云わせ、「保吉の信ずるところによれば、さう云つた時の彼の声は天使よりも優しい位だった」と書き添えて、猫なで声で主計官を皮肉る保吉を書き、自己の当意即妙を誇る芥川の相を示すことになっています。

それでもこの場合は、非人間的な主計官に対する軽い批判になっていますが、「あばばばば」(大12・12「中央公論」)ではつまらないことに意地を張っている保吉を浮き上らせるだけです。ある店にマッチを買いに入つて、その店の主人が「生憎マッチを切らしましたから」と云つて、景品用の小型のマッチを出し、どうしても金を取ろうとしない時に、意地を張り通して、小僧から一銭のマッチを受け取つて代価を払つて出て来たり、同じ店にココアを買いに入つて、小僧がこれだけしかないと云つて、彼の尋ねた品と異つたものを出してきた時に、見渡した店に別の種類のココアのあるのを発見し、小僧に注意するのですが、小僧はそれを聞かず、自分の出してきた種類に固執していますので、その品の悪口を云い、他の種類を内儀さんに探させた掲句、彼が見付けた別の種類のココアを買つて、店から出て来ています。いずれの場合にしても、主人や小僧が意地を張っているのに對抗して意地を張り、自己の意地を張り通して快哉を叫ぶ保吉が描かれています。これらはそれ程意地を張らなければならぬような問題ではありませんし、不愛相な主人やぼんやりした小僧の意地張りに対する苛ら立ちと、奇妙な対抗意

識から出ただけですので、保吉の神経の周囲の条件に動かされ易い状態であったことと、意地張りな主人や小僧をからかおうとする気が昂じたものに過ぎないことを示しています。

芥川が海軍機関学校の嘱託教官であったのは、大正五年十二月から八年三月までですから、前記の出来事はいずれもその間にあったことでしょうが、それを大正十二年に書いているのですから、一応は反省していたにしても、なおこうした皮肉と意地を張り通すことに心惹かれていた芥川であったことを示しています。こうした点は「蜃気楼」(昭2・3「婦人公論」)や「玄鶴山房」(昭2・1・2「中央公論」)などにも見られます。

「蜃気楼」は友人と三人で鵠沼の海岸に蜃気楼を見に行つて、牛車の二すじの轍を見て、逞しい天才の仕事の痕と観じて圧迫に近いものを感じたり、砂浜の漂流物の中に水葬の死骸に付けられる札を見出して無気味さを感じたり、断髪、バラソルの女に出会つたりしたことが書かれています。逞しい天才作家として活動し得ず、神経だけが病的なまでに異常に鋭くなっている主人公の相を浮き彫りにし、夏目漱石、志賀直哉に圧迫を感じていた芥川が、一面では皮肉な眼を向けて非個人的な「新時代」を軽蔑しながら、密かに新時代的な生を生きる積極性に倣つて自らも実行しようとして、それも出来なかつたことを書いています。

目当ての蜃気楼ははつきりしませんでした。海岸で出逢つた二組の男女は、いずれも「薄いインパネスに中折帽をかぶつた男」と断髪でバラソルを持ち、踵の低い靴をはいた女の組合せです。「この方が反つて蜃気楼ぢやないか？」と云われる程、よく似ていま

す。同行していた大学生のK君に「新時代」と云わせていますが、この「新時代」は島崎藤村が「並木」（明40・6「文芸春秋」記念増刊「ふた昔」）に書いている「新しい時代」とよく似ています。

「美しい洋傘を翳した人々は幾群か二人の側を通り過ぎた。昔のやうに内輪に歩いて居る娘は一人も無い。いづれも親泣かせと言ったやうな連中が、互に当世の流行を競ひ合つての風俗は、華麗で、奔放で、絵のやうに見える。色も、好みも、皆な変つた。中には男に繊弱な手を預け、横から私語かせ、軽く笑ひ乍ら樹蔭を行くものもあつた。妻とすら一緒に歩いたことのない原は、この大胆な振舞に怖毛を震つて、時々立留つては嘆息した。是が首を延して翹望して居た『新しい時代といふものであらうか。』斯う原は心に驚いたのである。」

とあります。原とあるのは戸川秋骨です。戸川と馬場孤蝶とが日比谷公園の辺りで見たものですが、芥川らが鵠沼の海岸で見た男女とどれ程異っているでしょう。着ているもの、履いているものに違いはあるにしても、本質的には殆ど異っていないと云えましょう。現実に足を付けず、非個性的でもありません。芥川が括弧付きで「新時代」と書いた所以でしょう。

処がその夜夕飼をすませた後に、主人公は友人のO君や妻と一緒に再び海岸を歩いています。途中でマッチをともし、その明るさの及ぶ僅かな範囲にも種々な物のあることを示すO君を書いて、一人の人間の見得る範囲は狭いが、その他の地域にも彼が見たと同様な事柄や全く未知の事が数多く存し、一つの現象の背後にも種々の事の在ることを暗示し、それ故に自らも「新時代」の味わいなり、大

胆さなりに触れようとしたのですが、天真爛漫な思兼尊の姪には言葉もかけることが出来ず、しとやかで、甘んじて自己を犠牲にする櫛名田姫と結婚する素戔嗚を描いた芥川は、此処でも友達二人が並んで、細君を少しおくられて歩かせたり、皆が一行に並んでも主人公にはO君とだけ話をさせていますし、O君と別れた後は、勿論夫婦だけですが、彼等に「東京からバタはとどいてゐるね?」、「バタはまだ。とどいているのはソウセエヂだけ」という生活臭の強い会話をさせるだけで、家へ入れて了います。

「新時代」に倣おうとした夜の散歩にO君を同道させた主人公——芥川自身——には、「新時代」の大胆さを模倣させることも出来なかつたのです。老婆の言動に影響されて、大胆に自分の生命維持の為に生きようとする下人を書いた人は、所詮大胆には生き得ない自己であること、日常生活の場に於ても、具体的・現実的な烈しい生活の場からは遊離した処に生きる存在であることを、はつきりと示して了つたのです。そして「新時代」の否定的側面だけを浮き上らせる人になっています。

「玄鶴山房」でも同様な傾向が見られます。一方に人間のすさまじい愛慾本能の現れを玄鶴の病妻お鳥に示し、幼い子供にその芽生えの存することを示した作者は、他方に主人の葬儀に表立っては参列し得ない妾を描いています。後者に関しては上総の或る海岸の漁師町に住まなければならぬ妾母子を考えて、「険しい顔をし」てリイブクネヒトを読む大学生を登場させ、前の問題に対しては、その気持を積極的の生き得ない場所にいるが故に、病人達やそれを見護する人々の心を緩なして、愛慾の本能のうずきに悶えさせ、或は

嫉妬する男女を冷やかに眺める看護婦を描き、傍観者の手練手管と社会主義の問題点を浮き上らせています。「雛」(大12・3「中央公論」)でも、時代の進歩は新しい文明をやがては古いものとする可能性を持つことを示し、更に古い形式にこだわる人の内にも、自己の感情を何とかして具体的に生きようとする気持のあることに触れながらも、一般の人々の持つ情趣的な好みを否定し、急進的な政治思想に心惹かれていた青年の観念的な生き方が、容易に実現せず、苛立ちにつながり、最後には身を亡ぼす危険のあることを指摘した人は、「河童」(昭2・3「改造」)でも、「両親らしい河童を始め、七八匹の雌雄の河童を頸のまはりへぶら下げながら、息も絶え絶えに歩いてゐる」年の若い河童を描いて、個を梗塞する家、家族の実態を示し、若い雄の河童を追いまわし、抱きついてその嘴を腐らしてしまふ、雌の河童の愛慾の本能の怖しさに触れ、不要になつた職工の河童を殺して食料にしてうことを合理的な方法とする資本家河童を書いて、資本家のエゴイズムを指摘し、友の死を悲しむよりはその葬送曲の完成に一所懸命になる芸術家の功名心に触れ、個性主義を主張しながら円満な家庭と卵焼きに憧憬れる超人的恋愛家を書くなど、種々の問題に気付いていることは示していますが、それらをいづれも河童の国の出来事とし、それを指摘する話し手を狂人としなければならなかった人でもありました。

「彼はいつ死んでも悔いしないやうに烈しい生活をするつもりだつた。が、不相変養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけてゐた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。彼は或洋服屋の店に道化人形の立つてゐるのを見、どの位彼も道化人形に近

いかと云ふことを考へたりした。」(或阿呆の一生・三十五 道化人形)

とも書いています。ある郊外の二階の部屋で度々喧嘩をし、それは時には「彼の養父母の仲裁を受ける」程の烈しいものでしたが、しかも「誰よりも愛を感じてゐた」伯母との生活に、「何か気味の悪い」歪みを感じていた彼は、「いつ死んでも悔いしないやうな烈しい生活を」したいと思ひながら、「養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけ」、自己の生活を自主的に生き得ない自己、皮肉を浴びせかけないではいられない相手でありながら、手酷しく批判するかわりに尻尾を振るような態度をとる自己、「新時代」に心惹かれながら、主人に死に別れて、遺族からは殆ど顧られない妾母子の問題などについては、必しも十分に考えようとしないうち、新しい思想に対しては、「僕の瑞威から(遺稿)」(昭3・2「驢馬」)の中で、

娑婆苦を最小にしたものは／アナキストの爆弾を投げる。  
 //娑婆苦を娑婆苦だけにしたいものは／コミュニニストの棍棒をふりまはせ。//娑婆苦をすっかり失ひたいものは／ピストルで頭を撃ち抜いてしまへ。(「信条」)

誰よりも十戒を守つた君は／誰よりも十戒を破つた君だ。//誰よりも民衆を愛した君は／誰よりも民衆を軽蔑した君だ。//誰よりも理想に燃え上つた君は／誰よりも現実を知つてゐた君だ。//君は僕等の東洋が生んだ／草花の匂のする電気機関車だ。(「レニン第三」)

諸君は唯望んでゐる、／諸君の存在に都合の善い社会を。//この問題を解決するものは／諸君の力の外にある筈はない。//ブ

ルジョアは白い手に／プロンタリアは赤い手に／どちらも棍棒を握り給へ。//ではお前はどちらにする？／僕か？ 僕は赤い手をしてゐる。しかし僕はその外にも一本の手を見つめてゐる、——あの遠くに餓死した／ドストエフスキイの子供の手を。(「手」)

とうたい、「氷河の懸った山の上には禿鷹の影さへ見えな」い、荒涼たる山道を執拗に登りつづける「脊の低い露西亞人」レニンは、「誰よりも民衆を愛し」、「誰よりも現実を知」った上で、「理想に燃え上った」人としながらも、「誰よりも民衆を軽蔑した」ものであり、その思想は階級エゴイズムの一種に過ぎず、結局は「娑婆苦を娑婆苦だけ」で終らせるものでしかなく、しかも観念的で、「遠くに餓死したドストエフスキイの子供の手」の存在を見落し、民衆の具体的、現実的な苦悩を直接的に解消し得るものになり得ていないことを指摘せずにはいられない自己であることを示し、そうした自己は、かつて「人並み以上に語学の才能を具へて」いるが、その才能を、江の島の岩場で銅貨は追わない海女を海中に飛び込ませる為に、銅貨を煙草の銀紙に包んで、その目的を達するとうりようなことに用い、「口もとに残酷な微笑を浮べた」男を、「人並み以上に鋭い犬歯をも具へてゐるものとして友人とした信輔(「大導師信輔の半生」)と殆ど異なる存在であることを承知し、それは「道化人形」的存在であり、「頸を挙げて立ってゐたものの、黄ばんだ羽根さへ虫に食はれてゐた」、古道具屋の店に置かれた「剝製の白鳥」に過ぎないと観念してゐるのです。其処には「烈しい生涯」に憧憬れ、遅しく生きた民衆の活力に自己の生の規

範を見出しながら、「才能の多少を問はずに友だちを作ることは出来」ず、知巧的な技巧を生み出す才能に溺れ、その出生の不幸の故ではないかと思われませんが、奇妙な歪みを感じながらも養父母や伯母との平和な生活に執着して、新時代にふさわしい人間としての在り方を樹立することが出来ないままに、「西洋風の梯子」の途中にんだままで地上を見下して来て了った人の相が見出されます。

「或阿呆の一生」の最後は、

「彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。彼の頭は○・八のヴェロナアルを用ひて覚めた後の外は一度もはつきりしたことはなかった。しかもはつきりしてゐるのはやつと半時間か一時間だった。彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刀のこぼれてしまった、細い剣を杖にしながら。」

という敗北宣言をもって終つています。人工の翼の自然の力の前での無力を理解し、世紀末を乗り切ろうとした数多くの個性の種々な努力も、資本主義社会の問題点を克服し、新しい世紀を切り開くだけの力を持ち得ず、多彩な個性の個性的な努力の末に到達し得た、一つの境地に過ぎないものと観じた人は、新しい時代を築こうとする人にも全き信頼をおくことが出来ず、我執を見ないではいられないこともあって、来るべき世界に明るい可能性を見出すことが出来ず、自らも在るべき新しい世界建設の過程を具体的に考察し得ず、自らの内に培われた知巧的な主知主義の限界を知りながら、それを脱却し得る術を身につけることの出来ないことを悟った人でもあった為に、我の叛きて行かざる道であるプロレタリア文学が成立、

発展し、多くの知識人はその流れに接近をはかっている時に、そうした時代の流れの中で、堪忍ぶ強さと更に自己を喰い破って生きる逞しさを持ち得ないで、そういう自己の形成過程なり、日常生活の種種相や問題に対しての苦悶の跡なりを遺書として、久米正雄宛に、或は或る旧友宛に書き残して自殺するより外の途を考えることが出来なかつたのです。批判しながらも新しい時代の展開を覗いた人は、漱石の「こゝろ」の先生が、彼を崇拜している「私」に遺書を残して、明治の精神に殉死したのに倣って、世紀末に現れた種々の思想を近代的教養として身につけては来たのですが、逞しい行動性を失ってしまった、近代教養主義の時代、或は大正教養主義の時代の終焉を覗いたが故に、そうした時代に殉死して了つたのです。

「現に僕は二三度行つて、何だか夏目さんにヒノタイズされさうな、——たとへばだ、僕が小説を発表した場合に、もし夏目さんが悪いと云つたら、それがどんな傑作でも悪いと自分で信じさうな、物騒な気がし出したから、この二三週間は行くのを見合せてゐる。人格的なマグネティズムとでも云ふかな。兎に角さう云ふ危険性のあるものが、あの人の体からは何時でも放射してゐるんだ。だから夏目さんなんぞに接近するのは、一概に好いとばかりは云へないと思ふ。我々は大人と行かなくつても、まあいろんな点で全然小供ぢやなくなつてゐるから好いが、さもなかつたら、のつけにもうあの影響の捕虜になつて、自分自身の仕事にとりかかるだけの精神的自由を失つてしまふだらう。云々」

という手紙を菊地寛宛に書いたと、「あの頃の自分の事」別稿（大

8・1）に書いた芥川は、一度は「或阿呆の一生」の中に「センセイキトク」の電報に「歎びに近い苦しみを感じ」、漱石の死にホッとした解放感を味わつた自己の相を示しはしたのですが、結局最後まで漱石の影響から脱却し得ないままに、「地獄変」の良秀の自殺に「こゝろ」の先生の自殺の影響をうけたことを示しただけでなく、自らも「こゝろ」の先生の軌跡を追つてしまうことになつたのです。丸善で「新しい本」を探しあぐねた人が見出したものは、同じ江戸っ子で大正教養派の人々から先生と称ばれていた漱石だったということでしょうか。

（昭五九・八・二九）